
喫茶いわゆる花屋店

ちよやちよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喫茶いわゆる花屋店

【Nコード】

N1090Z

【作者名】

ちよやちよ

【あらすじ】

喫茶いわゆる花屋店。それは小さな町の寂れた通りにある、喫茶店でもあって花屋でもあるという、何ともよくわからない店。そこではもっとよくわからない人達が働いているわけで。そんな彼らの日常をお届けします。

その1 ここがいわゆる

「喫茶いわゆる、喫茶いわゆる、喫茶……あ、ここ……か？ ……」
喫茶いわゆる……花屋店？」

ある日の午前十時過ぎ、ある商店街の一角。奇妙な店名の店の前で少年は立ち尽くしていた。

「喫茶いわゆる花屋店って……いったい喫茶かいわゆるか花屋店かどれなんだ!？」

「その3択はおかしいだろ」

「ひゃあ!」

突然店内から出てきた人影に典型的な驚き方で驚く少年。出てきたのは黒髪で長身な女性である。

「……なんだオマエ、ちっこいな」

「何ですと!？ ち、違いますよ。あなたが大きいんですよ! 黒髪で長身な女性って紹介されたし!」

「……それは言っちゃいかんのじゃないか？」

何故か一人でパニックに陥る少年に、女性は構わず近づき、少年の真っ黒でストレートな髪を掴んだ。

「ちょ、ちょ、な、何ですか!？」

「オマエ……か、可愛いな」

「へ？」

「ちょっと家に持ってかえっていいか？」

「いやダメでしょう！」

女性はものすごく不服そうに頬を膨らませるが、諦めている様子はまったくくない。その右手を少年の頭髮から一向に離そうとしないのだから。

「えっ、ちょっと、ここは『いやダメでしょう！』ってツツコミをいれて諦めるって流れなんじゃないんですか？」

「そんなことは知らん。私のものは私のもの、オマエのものは私のものだから、オマエの体も人権も私のものだ」

「どこのガキ大将！？　ってかなんで初対面で人権まで奪われなくちゃならないんですか！？」

「違う。奪うんじゃない。オマエが献上するんだ」

「殿！？」

そんな理不尽な契約が今まさに結ばれようとしている時、またしても店内から人が出てきた。今度も長身は長身だが、茶髪の男性である。

「オイ、何やってんだ」

「おお、ツン。実はな、オマエに養子の話が」

「断る」

「じゃあペット」

「いやだ」

「じゃあ旦那……いやむしろ嫁だな」

「それは法的に無理だ」

女性の連続ボケに対し冷静沈着に対応するツンと呼ばれた男性。それを常識人と判断したらしい少年は、いつのまにやらツンの後ろに隠れていた。

「すまん。コイツ、バカだから」

「バカとはなんだオイ」

「はい、大丈夫です！ それよりツンさん、僕の話聞いていただきたいんですけど」

「話？ いいけど、ツンって呼ぶのは」

「そいつの本名ツンだから」

「へえ、変わってますね。名字は何ですか？」

「ツンだよ」

「名字も!?!」

「んなわけねえだろ」

ツンが冷静なツツコミをするもスルーされ、何故か話はあらぬ方向に。

「っていうかツンには名字も名前もないよ。商品名ツン、原材料名ツンでツン以上でもツン以下でもないツンなんだよ」

「ええ!?! 以上とか以下ってその数を含む言葉なのに以上でも以下でもないってことは……ツンさんいない!?! ツンさんいるのにいない!?! 怖い!」

「……怖いのはお前の発想力だろう」

ちよつと、いやかなり呆れた風なツンだったが、道を外れる前の話を思い出して少年に尋ねた。

「そういえばさっき、俺に聞いてほしいことがあるって」

「あ、そうでした! えつとですね、聞きたい話ってのは……えー……なんだっけ?」

「オイ」

「て、てへっ」

「持って帰るぞオラァ！」

少年の仕草を見て、女性は少年に今にも飛びかからんばかりに言う。

「す、すいません！」

ある意味最強の脅し文句である。

「えと、ちょっと忘れちゃったんで、また思い出したら来ますね」

「ん、おお」

「それじゃまた。さよならー」

「今度はツンの養子になる準備もしてこいよー」

「そんな準備ねえよ」

「いや、養子縁組書類とか」

「本格的過ぎるだろ」

嵐が過ぎ去った後のように静まった商店街。その一角の喫茶店のような花屋のような曖昧な店の中で書類を見ながらツンが女性に言った。

「なあ、そういや今日高校生がバイトの面接に来るって電話が来てただけど、もしかしてさっきのアレか？」

「……いや、それはないだろ。身長からしてアレは良くて中一だろう」

「だよな。まさかな」

「うん。まさかそんなはずない」

そのまさかでした。

その2 厨二あらわる

「あの、この前はすみませんでした」

「いや、気にするな」

「……でも、バイトの面接に来たのに忘れちゃって」

「まあそういうこともあるだろ」

「ああ。私らだってあんな小さい奴がバイト希望者だとは思わなかったしな」

「小さくないですってば!」

頭の上に置かれた手を振り払おうとしているのは、この前の黒髪の少年。バタバタと暴れるが全く意味を成していない。

それでもなんとか女性の腕を掴むと、目を潤ませながら言った。

「あ、あのですね、実は僕、背の高い女性がちょっと苦手というか……だからその、あ、あんまりいじめないで下さい……うう」

「……な」

「な?」

「なんだこいつはっ!」

「ひい!?!」

「可愛すぎる！ 持ってかえる！ 晩御飯にいただく！」

「待て。いろいろと待て」

ツンの冷静なツッコミにも聞く耳持たず暴走する女性から逃げ出そうと、半泣きになりながら必死にもがいた少年は、その勢いで転んで廊下に飛び出てしまった。すると、その先には今度は身長160センチほどの女性、といっても高校生ぐらいの少女が立っていた。

「あっ、大丈夫？」

「あ、だ、大丈夫です！ すみません！」

「別に謝らなくても……ってうわっ！ 何この子可愛い！ 店長の娘さんですか！？」

「ニコ……オマエには私がそんなぐらいの娘のいる年齢に見えるのか、オイ」

「あ、いや別にそういう意味で言ったわけじゃ……ただ可愛い子だったもので、つい」

「まあたしかに可愛いのはわかるが」

「いやさっきから可愛い可愛いって、僕は男ですってば！」

「僕っ娘キタコレ！」

「谷中、うるさい」

そのやりとりを見て、店長と呼ばれた女性は右手で頭を抱えるような仕草をしてから言った。

「ニコ、オマエの言うことはイマイチわからん時がある。普通に喋れ」

「え、あ、すいません。またやっちゃいましたね……」

「どうかしたんですか？」

「ん、ああ。あいつ、あ、谷中ニコって言うんだがな。普段は普通の女子高生やってんだけど、テンションが上がるとわけのわからんことを言う癖というか性格なんだ。まあそうなった時は放置に限るぞ。会話にならんからな」

「は、はあ……」

なんだかこの店内でコミュニケーションを取れる自信がなくなってきた少年。そんな彼に店長が声をかけた。

「つーかオマエ、名前を名乗れ。どうせ可愛い名前なんだろう。苺畑ペコとか」

「そんな名前の男いませんよ！　なんですか苺畑って！　僕は塔野大志っています！」

「大志？」

「あ、はい。大志です」

「大きい志？」

「……はい、そうですけど」

「……まあ、志は身長とは関係ないからなあ」

「どういう意味ですかそれ！」

ぶー、と頬を膨らませて怒る塔野をなだめつつ、『あ、そういえば』という言葉に続けて店長が思い出したように言った。

「私も自己紹介してなかったな。私の名前は所謂 小夜だ。従業員からは大体店長と呼ばれてるから、まあオマエもそう呼んでくれ」

「……えーっと、小夜っていうんですか？」

「ああ。小さな夜で小夜だ」

「……ぜ、全然小さくないのに！ 何でですかもう！ わけわかりませんよ！」

「わけわからんのはオマエだ」

本当にわけのわからない理由でキレル塔野。それを見てツツコミをいれながらも嬉しそうにする小夜。そんな妙な光景を見ていたニコがツンに耳打ちで尋ねた。

「えっと、あの……もしかして、店長って塔野くんのこと好きなんですか？」

「いや、アイツはああ見えて可愛いもん好きだからな。塔野がちっさくて可愛いんだろ、多分」

「ですよ。やっぱりシヨタはBLですもんね」

「……聞かなかったことにしとく」

ニコが真顔でそんなことを言うのでツンは頭を抱えてそう言った。コイツ、本当に大丈夫かと切に思いながら。

ツンのそんな思いなど露知らず、ニコはまだ頬を膨らませる塔野のもとへ向かった。

「こんにちは」

「こっ、こんにちは」

「私、まだ自己紹介してなかったよね。私の名前は谷中ニコ。いつもニコニコしてるようになってつけられたらしいんだー」

「あ、ど、どうも。塔野っていいいます」

「よろしくね!」

「ひっ、ひゃい!」

「塔野オマエ持ってかえる……じゃなかった。ニコもダメなのか? 私はたしかに身長も170近くあるが、ニコは160ぐらいだろ」

「いや、あの……150を越えられると、ちょっと」

「まともに会話できるヤツ限定されすぎだろ」

その会話中も目を合わせようとしない塔野に、さすがの小夜も本気で心配になったらしい。小さくため息をついてから聞いた。

「オマエ、それで接客できるのか？　ここに来る客なんざ大人ばかりだぞ？」

「だ、大丈夫です。毎回死を覚悟してから行きます！」

「一体何がオマエをそうさせるんだ」

「す、すいません……」

「まあ構わん。ミスったら私が持つてかえるだけだしな」

「ええ！？　ち、ちょっと待って下さいよお！」

「おい、小夜。塔野が可愛いかなんか知らんがあんましいじめるな。そんなんだと従業員いなくなるぞ」

「大丈夫だって。またツンが集めてくれればいいだけだから」

「それが嫌なんだよ」

はあ、とため息をつくツン。塔野はその時、一人ある言葉にひっかかっていた。

「え、ツンさん今店長のこと小夜って呼びました？」

「ん、ああ」

「お、お二人ってもしかして」

「そう、オマエの予想通りだ」

「おい待て小夜」

「そうなんですね!」

「ああ。又従兄弟だ」

「やっぱり!」

「え、予想通り?」

予想外な反応に思わず目を見開くツン。それを見てフンスと鼻息一つ、塔野は小さい体で大きく胸を張る。

「さらに僕の予想では、ツンさんの方が年上でしょう?」

「ん、ああ。そうだ。よくわかったな」

「ふふふ、僕は実は人の心が読めるので」

「超能力設定キタコレエエ!」

突如飛び込んできた人影は、もちろんニコ。目を爛々と輝かせている。もちろん塔野はツンの後ろに全速力で隠れた。

「シヨタで超能力使いとか！ マジ俺得！ ちょっと早く生まれ私の非日常！ 右手がっ！ 邪気眼がっ！ うず」

「うるせえ」

小夜の拳骨一閃、ニコ撃沈。そのまま襟首を掴んでズリズリと引きずっていく。

それを見て、ツンは小さくため息をついた。

「俺が年上つつつても、アイツはあんな感じだからな。しかも元ヤンなんだよ、実は」

「えっ」

それを聞いて少し顔がひきつる塔野。それを見て、ツンは少しだけ笑った。

「ま、とにかく気をつけろよ」

「……はい」

本当に気をつけよう。そう心に誓った塔野だった。

その3 小夜は照れゆる

ある日曜日。今日は塔野の初出勤日。ちょうど昼時だから客もこれから増えるであろう時間帯だ。

そして、当の本人はと言うと。

「……イ、イラシャイマセー」

おもいつき緊張していた。

「おい塔野、わかってると思うが客の前でもそんな様子なら……持つて帰るぞ?」

「は、はい! すみません! ちゃんとやります!」

そうは言うものの、塔野の顔からは緊張の色が滲み出ている。というか、なんだか顔がいつもよりカクカクしているように見える。

「おい……本当に大丈夫か、お前」

「ツ、ツンさん。ダイジョブデスヨー。イラシャイマセー」

「……ダメだろこれ」

「ふむ……確かにこれはちょっとひどいな」

小夜がいつになく真顔で言うと、ツンは少し驚きつつも、『ああ』と言葉を返す。

「どうしたもんか……」

「ふっふっふ」

小夜とツンが頭を抱えていると、不敵な笑みを浮かべ、物陰から出てきた人物。右手を顎にあて、左手で二人を指差した。

「話は全て聞かせてもらいましたよ！」

「お前、それが言いたかったただけだろう」

「あ、バレました？」

そして『あっはは』と爽快に笑うのはもちろんニコ。名前の通りにニコニコしている。

「いや、でもね、それだけってことはないんですよ。ちゃんと塔野くんの緊張をほぐす方法、考えましたから！」

「……本当か？」

「うっ、ツンさんそんなに疑り深い目で見ないでくださいよ。たまには私も真面目に考えますよ？」

「お前はどうにも信用できんからな」

「な、店長までひどい！」

「とりあえずさっさとその方法を言えよ」

小夜が急かすようにそう言うと、ニコはチツチツチ、と人差し指を立てて左右に動かす。

「急いじゃいけませんよお嬢さぶっ！」

「早くしろ」

小夜のチョップはニコの脳天におもいきり直撃し、ニコの頭上に星を踊らせた。

「うー……冗談なのに」

「そろそろ客が来る時間帯なんだよ。冗談言ってられるか」

「それもそうですね。じゃあ作戦を發表しましょう。名付けて、『眠りの森の美シヨタ』作戦！」

「……………」

「……………」

「イラシヤイマセー」

無論、ツンも小夜も啞然である。そしてその感情は少しでも期待した自分に対する後悔の念へと早変わり。

「作戦名はアレですが、内容はすごいんですよ！」

「アレってわかってるなら付けるなよ」

「……とにかく内容を話せ」

呆れながらつつこむツンも、『早くこの話終わらせたい』と思いついてきた小夜も、とりあえずはニコを促す。期待なんて全くもってしていないのだが。

「じゃあちよつと店長、来てください」

「なんだ」

「いいから!」

ニコは小夜だけを呼ぶと、その耳元で何やら耳打ちをする。

「……で、……して」

「……ふむ。ふえ!? え、いや……そ、それは」

「……?」

ニコニコというかニヤニヤしているニコに対し、小夜の顔はみるみる真っ赤になっていく。

あの作戦名、ニコの表情、小夜の反応からして……『そういうのか。』

ツンは推測してから、頭をポリポリとかき、少し困ったような表情をしていた。少しすると、話は終わったのか、小夜をおいて、満足そうな顔のニコだけが近づいてきた。

「お前、小夜に何て言ったんだ?」

「えー？ それはあ、ヒ・ミ」

「どうせ塔野にキスしろとか言っただろ？」

「な、なぜそれを？ まさかあなたも能力ぶっ！」

拳骨一閃、ニコ撃沈。

しかし今回は立ち直りが素早かった。

「な、何故わかったんでしょ？」

「いや、まあ眠れる森のなんとかって言った時点で少し予想はしてた。で、小夜のあの反応だろ？ あいつ、元ヤンで滅茶苦茶なやつなんだが、恋愛経験はからっきしなんだよな。だからその手の話になると」

ツンが一瞥した先には、小夜。本当に茹で蛸のように顔を真っ赤にして、自分の唇に人差し指をあてがっている。

「……キ、キス……むう」

「ああなる」

「な、なんですかあの乙女店長は」

「俺に聞くな」

小夜はモジモジしながら、相変わらず真っ赤な顔をニコに向ける。

「ほ、ホントにキ、キスしたら塔野の緊張はほぐれるのか？」

「……か、可愛い！ なんなんですかあの店長は！ もう！」

「だから俺に聞くなって」

「お、おい、ニコ……聞ってるのか？」

「へ？ あ、はいもちろん！ そうしないと塔野くんは緊張しっぱなしですよ！」

「そ、そうか……」

「……お前、どんな根拠があって言ってるんだ？」

「そんなもんありませんよ！」

「おい」

最後のツンとニコの会話は聞いてなかったのか、小夜はどうやって塔野にキスをしようかと俯きながら考えていた。

「い、いきなりすれば……でも私大きいから怖がられちゃうし……ううう」

「顔赤らめながら俯いてモジモジしてる店長萌え」

「……もう好きにしろ」

もう見学者側にまわることにしたツンはニコにそれだけ言うと、近くの椅子に座った。ちなみに現在、開店中にもかかわらず客は一

人もいない。

「……よし、いこう」

一世一代の覚悟を決めたかのような表情で一つ呟いてから、小夜は塔野に一步、また一步と近づく。

「イラシャイマセー」

「……と、塔野」

「イラシャイ……て、店長？　な……なんでしょう？」

「お前に、その、なんだ……アレ、してやる」

「……アレ？」

それじゃわからんだろ、とツンは思ったが、言っても聞きそうになかったので言わなかった。

塔野くんが変貌して『まったく……悪い子猫ちゃんだ』とか言つて乙女店長が照れまくりな展開希望！、とニコは思ったが、ツンに拳骨をお見舞いされそうだったので言わなかった。

「そ、そうだ。アレだ」

「アレ……ですか」

塔野は必死に『アレ』にあたるものを考えてみるが、全く思いつかない。それでもなんとか頭を振り絞って、1つの答えを導きだした。

もしかして『アレする』シメる？

塔野はハツとして顔を上げ、手を思いっきり突き出して拒否のポーズをとる。

「い、いえいえいえ！ 滅相もない！ 遠慮します！」

「わ、私に気を使ってるなら別にそんなことは構わないんだ。あ、もちろんアレだぞ、ほったただぞ！」

ほった？ ほったをストレートで打ち抜くんですか？
塔野はついに小さく震えだした。

「あ、あややや、け、結構です！ そ、そういうのはもっとこう……するべき時があると思うんで！ こんなところでしたらアレでしょう？」

震えながら嘆願する塔野。もちろん絶賛誤解中である。

「するべき時……か。まあ確かにそれはあると思う。でも別にお前相手ならいいんだ。その……か、可愛いし」

『可愛い』可愛いがってやるぜ『フルボッコ』そんな等式が頭の中に浮かんだ塔野は最早涙目である。『おろろ……』と声にならない声をあげている。

「……なんかおかしいよな」

「はい。あれは塔野くん、完璧に誤解してますね」

「まあ会話は繋がるっちゃあ繋がるけどな」

そんなツンとニコの会話など露知らず、小夜と塔野は互いにモジモジガクブルしあっている。

「え、あの、でも」

「も、もうオマエの意見は知らん！　いくぞ！」

「え、あ、ちょ、待っ」

カランコロンカラン。

小夜が塔野の肩をガッチリと掴み、その顔が塔野の頬に近づき始めた瞬間、少し馬鹿らしく聞こえるほど馴染みのある音がして入り口が開いた。小夜は素早く塔野の肩から手を離す。そして四人は一斉にそちらを向いた。

「おお、小夜ちゃんこんにちは。何してたんだい？」

60半ばほどの親しげな笑顔の男性が、少し不思議そうに小夜に問いかける。

「え、あ、いえいえいえ！　何でもございません！」

「……誰？」

「客だよ！　挨拶しろホラ！」

「あっ、はい。いらっしやいませ」

さらりと応対を始めた塔野。それを見て、ニコがツンにぼそりと

眩く。

「……普通に言ってますね」

「そうだな。ま、一応お前の作戦は成功、ってことになるのか？」

「ダメですよ！ 店長と塔野くんのキス写真を収めてませんもの！」

「……いらんだろ」

呆れ果てた顔のツンはゆっくりとキッチンの方へ向かい、それを見てニコは客のオーダーを取り始める。塔野はそれを横で見え勉強し、小夜は先ほどのことを思い出して顔を真っ赤にしている。そんな感じで、今日も喫茶いわゆる花屋店、開店です。

その4 小夜とツン似る？

「ツンさんと店長って、やっぱり似てますよね」

始まりは、塔野の何気ないこんな一言だった。

「……あ？」

「ひっ」

その言葉に対し、今までにないほど恐ろしい表情を見せたツン。それを見た塔野はビビりまくりである。

「え、あ、だってその、髪形も似てるし、目とかも」

「似てない……だろ？」

「あの、えっと」

「ツン、何塔野をいじめてんだ」

そこに颯爽と現れたのは小夜。しかし救世主とは成り得なかったようで、塔野はさっきまで恐れていたツンの背後に瞬時に隠れてしまった。

「別にいじめてねえよ。カス沢事件以来の暴言を吐かれたもんでちよっとイラついただけだ」

「カス沢……ああ、あいつか。んで、オマエ何て言ったんだ？」

「いや、ツンさんと店長が似てるなあって」

「……あ？」

「ひいいい！」

恐怖再び。正直言って反応が一緒な時点でこの二人結構似ている。しかしもちろん塔野はそんなことは口にしない、というかできなかった。

「似てないだろ……全然似てないだろ」

「だ、だって髪形とか！ 二人とも縛ってますし！」

塔野の言う通り、長さに違いがあるものの、ツンも小夜も後ろで髪を縛っていた。しかしそれを言われた途端、二人同時にゴムを引きちぎった。

「ええ！？ ちぎった！」

そして何故か『ツンと小夜はどれだけ似ていないか？』という題で議論が始まったのだ。営業時間中なのに。

「お前、ちぎってねえよ。なんかゴミがついてたからだな」

「私は……なんだ、ゴミがついてたから」

「いや、ゴムですよ！ っていうか二人とも同じ理由じゃないですか！」

「お前真似すんなよ」

「オマエこそ真似すんなよ」

「真似すんなって言う方が真似してんだよ」

「じゃあオマエが真似してるんだろ」

「小学生か！」

至極もつともなツツコミである。

しかしそれを聞いた途端、言い合いをしていた二人は同時に塔野の方を向いた。

「いや、それはお前だ」

「いや、それはオマエだ」

「ひどい！　っていか何ですか！　息ぴったりじゃないですか！」

少し涙目な塔野が喚くと、二人はポリポリと頭をかく。

「だって俺小学生じゃないし。もう20だし」

「私18だし」

「いやそうじゃなく……若っ！　え、店長18ですか！？」

「なんだ塔野……オマエにはどう見えてるんだ？」

そう言う小夜の背後には『ゴゴゴゴ……』の文字が見え、何やら黒いオーラが渦巻いている。

「あ、いや、店長落ち着いているから大人びて見えると言うか」

「ふむ、つまりお前には小夜が二十代後半の行き遅れ女に見えていたと」

「ちょっとツンさん黙って！」

塔野はツンを制すが、もちろん小夜にも聞こえていたわけで。見ると、小夜は小さく拳を握りしめ、わなわなと震えていた。

「……………」

「えーっと、店長？」

「……………」

あれ？ 泣いてる？

塔野は異常を察し小夜の顔を覗き込むが、小夜は顔をそらした。

「あの、店長」

「……………」

「あのー……………」

「……………」

やってしまった。表情は全く見えないけれど、多分これは泣いている。

塔野はかなり焦りながら全ての原因であるツンを見やると、隣にはいつの間にやらニコがいて二人で何やら話していた。

何か嫌な予感がする。そう思った途端、ニコは塔野の方へ小走りで近づいてきた。

「ちょっと塔野くん、ダメでしょ」

「はい、すみません……。でも直接の原因作ったのはツンさんですし」

「違う違う。そうじゃなくてツンさんと店長が似てるなんて言っちゃダメでしょ」

「え、そこですか？」

「そうだよ。髪形も目も一緒なんて、描き分けられない漫画家じゃあるまいし」

「……何の話ですか？」

「そりゃね、カス沢先生の新作は確かにヒロインの外見がかなり前作のヒロインに似てるよ？ でもね、やっぱりキャラが違うんだから」

「……店長」

『カス沢って誰なんだ？』と心の中で呟きつつ、ニコの語りを華麗に無視して塔野は小夜の方を向いた。

「何て言うかその、すみません。っていうか僕はあんなこと思っ
ませんから！ ツンさんが言っただけで」

「……………」

「それにホラ、髪を縛ってない店長、なんか可愛いですよ！」

「本当か？」

「え？」

小夜が突然顔をあげて言うものだから塔野は思わず声が裏返っ
てしまった。

「本当に可愛いと思ってるのか？ こんなに可愛いオマエが」

「え、あ、はい」

「そうか……よし」

そう呟くと何もなかったように立ち去ろうとする小夜。塔野は思
わずそれを引き留めた。

「ちょ、店長、泣いてなかったんですか？」

「はあ？ 私がいつ泣いてたんだ」

「でもツンさんにあんなこと言われて顔を隠したじゃないですか」

「いや、それはツンがやれって言ったんだ」

「え？」

光の早さで塔野がツンの方を向くと、ツンは無表情でやる気なさげに手を振っていた。

「い、いつですか？」

「別にそんなぐらい、目を見りゃ伝えられるだろ」

「すごっ！ 無理ですよ普通は！ ってかなんですか、なんでこんなことするんですか！」

「いや、お前が小夜のことが苦手だって言うからそれを治してやろうと思って」

「逆効果ですよ！ 何なんですかもおー！ っていうか目で見て通じ合うとかもう双子レベルで似てるじゃないですか！」

「……………ああ？」

「ひひひひひひー！」

そして、背の高い女性がより苦手になる塔野であった。

その5 ニコあばれる

「百合って知ってますか？」

いつものように営業中にも関わらずそんなことを言い出したのはニコ。暇そうにしていたツンに話しかけたのだ。

「百合？ 花のことなら花屋に訊けよ」

そう言ってツンは親指で入り口とは逆側にある扉を指した。『喫茶いわゆる花屋店』というのは名ばかりではなく、実際に花屋も経営しているのである。扉を開けるとそこは花屋の裏口に繋がっているのだ。

しかしそんなことは既に知っているニコは『そうじゃなくて！』と声を荒げる。

「百合ですよ！ 女の子と女の子がチョメチョメするアレですよ！」

「チョメチョメってお前な……。まあ大体把握した。で、それがなんだって？」

「いやね、百合って何だか綺麗なものとして描かれる傾向にあるじゃないですか？」

「いや……俺は知らんが」

「でもね、BLは何故か排斥されてるんですよ！ おかしくないですか！」

「BLって……いや、確かにそれはないな。それはちょっと想像もしたくない」

「なんでですか！ 塔野くんとツンさんなんて完璧なカップなのに！ ツン鬼畜攻めの塔野シヨタ受けで！」

「お前は何を言っているんだ」

「だからつまりツンさんが塔野くんのアレをアレするんですよ！」

「……僕がどうしたんですか？」

興奮ぎみに語るニコの後ろの方から塔野が控え目に声をかけた。
やはりニコのことも苦手らしい。身長的な意味で。

「おおっと！ 受け手あらわる！ さあさあツンさん、やっちゃって下さい！」

「なにお前こわい」

鼻息荒いニコにツンはドン引きである。しかしそれ以上にニコを恐れていたのは、もちろん塔野。

「……に、ニコさん怖いです」

「怖くないよー？ ホモ怖くないよー？」

「いや、ホモは怖くないですけど、ニコさんは怖いです」

「ホモ怖いだろ」

聞き捨てならない台詞に思わずツンはツッコミを入れるが塔野はそれどころではない。小夜の時と同じように、ツンの後ろに隠れてしまっていた。

しかしそれは、ニコを一層暴走させる原因となってしまったようだ。

「ウホッ！ 塔野くん萌えた！ 久々に三次元に萌えた！」

「えっ、僕別に燃えてませんけど」

「天然キャラキタコレ！」

「……おい、谷中。ちょっとお前日本語喋れ」

「日本語喋ってますよ！ これはれっきとした日本語ですよ！」

「俺はそんな日本語は知らん」

「えー？ ツンさんちよつと世間知らずなんじゃないですか？」

「お前のいる世間と俺のいる世間を一緒にしないでくれ」

「ま、まさかツンさん、異世界の住人！？」

「もういいです」

呆れすぎて思わず敬語になってしまおうツン。しかしニコの暴走は尚も止まらない。

「ちょっと御兩人！ チューしてみてくださいよ！」

「すいませんできません」

「そんな、男同士でなんておかしいでしょう！？」 「なんですと！
？ 私の持つてる薄い本はいっぱい描いてあるのに！ じゃああれ
ね。塔野君は男同士はダメでも女の子となら良いんだよね！？」

「えっ、いやそういうことじゃ」

「店長ー！」

塔野の話など聞きもせずニコは小夜を大声で呼ぶ。確認のため
に言っておくが、今は営業時間内、開店中である。

「……なんだニコ？ お前うるさいな」

「いいから来てください！ 塔野君がチューしたいって！」

「な、なに！？」

先程までだるそうにしていた目を大きく開け、小夜は顔を真っ赤
にして照れ出した。本当に面白いなー、とその隣でニコがニヤニヤ
が止まらないといった風に笑っているのにも気づかずに。

「塔野……お前、だ、大胆だな」

「ええ！？ なんて信じるんですか！？ 嘘ですよ、ニコさんの嘘
！」

「……みなまで言うな。わかってる。お前だってそんなナリでも高校生。そういうことをしたいだろう!」

「いや、え、あの」

「正直、私だってそういうことはしたことがない。でも、なんだ、大丈夫だから!」

「え、何がですか!? え、ちょっと待って! うわあああ!」

塔野は突然迫り来る小夜に完全に恐れおののき、逃亡を図ったが、ニコに行く手を阻まれてしまった。

「逃がさないよ、塔野くん!」

「ええ!? 为什么呢ですか!」

「塔野くんと店長のキス写真を納めるまで、私は負けない!」

「だからなんでなんですか!」

塔野の必死の抗議も聞き入れず、ニコと小夜が今にも塔野を捕まえようとした時、突然裏口の扉が開いた。

「あのー……ちょっと声大きくないかな? こっちまで響いちやつてるんだけど」

と、顔を出したのは小夜と同じぐらいの身長 of 男性。ツンとは違い、いかにも人の良さそうな顔をしている。

それを見たたん、塔野はそちらに向かって全力で駆け、男性の

後ろに隠れた。

「うわ、びっくりしたあ！ キミ足はやいねえ」

「え、あ、はあ。そうじゃなくて、あの二人から助けてくださいお願いします！」

「んー？ ……ちょっと厳しいかなあ」

「な、なんでですか？」

「いやあ、小夜ちゃんとニコちゃんは僕も怖いんだよね」

「ええ！？ でもどうにか逃げないと」

「んー、じゃあとりあえずこっちに行って」

「へ？」

そう言って男は塔野の襟首を掴んで扉の中へ引っ張り、ひょいと軽く投げ、自分は喫茶店側に入って鍵を閉めてしまった。

「……ええええ」

塔野はしばらく落胆して動けなかったが、とりあえず喫茶店の反対側に扉が見えたので、ゆっくり立ち上がり、そちらへと歩いていた。

その5 ニコあばれる(後書き)

続く。

その6 花屋おとずる

扉を開くと、そこは異世界だった。ファンタジーな意味ではなく。

「ふわぁ……すごいなあ」

塔野は思わず感嘆の声をあげていた。それもそのはず。とんでもない数の草花が周りを取り囲んでいたのだから。

「これは花屋さんというより……植物園？」

「……お兄ちゃん？ 戻ってきてるの？」

「うわぁ！」

ふと、どこからともなく少女が現れ、それに驚いた塔野は思い切り尻餅をついてしまった。しかめつつ顔をあげると、そこにはあどけない顔をした小学生らしき女の子が。

「……あなた誰？」

「え、ああ。塔野大志って言います。喫茶店の方でバイトしてて」

「ああ、そうなの。まあどうでもいいけど」

「は、ははは……」

あまり上手く作り笑いも出来ず、視線の置き場所に困った塔野は少女の体を見ていた。

これは150センチもない。つまり普通にしゃべれる！ 怖くない！

思わず塔野がガッツポーズをすると、それに反応して少女がビクリとした。

「な、何よあんた急にガッツポーズなんかして。びっくりするじゃない」

「ああ、ごめんね」

そう言って『あはは』と笑う。自然体である。塔野が自然体でしゃべっている。こうしていれば爽やかな中学生にしか見えない。いや、実際は高校生なのだけれども。

「で、あんたは何しにきたの？」

「へ？ あ、何かしに来たというか、逃げてきたんだよね。店長とニコさんから」

「なるほどね。あんた小さいから小夜ちゃんに好かれそうだもんね」

「なっ……！！？ キミには言われたくないよ！ 僕より小さいくせに」

「はあ！？ あんたのが小さいわよ！ 大体なんで中学生がバイトしてんのよ！」

「な！ 僕は高校生だ！ キミこそ中学生のくせに偉そうじゃないか！」

「私も高校生よ！」

「ええ！？ 到底高校生には見えない！」

「それはこっちのセリフよ！」

会っていきなり喧嘩を始めた二人はしばらく視線を交錯させて火花を散らしていたが、やがて互いにそっぽを向いてしまった。

「ふん。いいよ、もう僕は出ていくから」

「勝手に出て行ってちょうだい……ってそっちはダメ！」

「へ？」

塔野が外へ出ようと草をかき分けたとたん、ぬるりとした感触を手で覚えた。不思議に思っ顔をあげると、大きな大きなお花が、そのお口を開いて塔野くんを待っていたのでした。

「うわわわわ！ な、なにこれ！？」

「ウツボカズラっていう食虫植物なんだけど、なんか大きくなりすぎちゃって。あ、その液体、触ったら手が溶けるわよ」

「ええ！？ 早く言ってよ！」

「すぐに処置すれば大丈夫よ。こっちに来て。やってあげるわ」

「あ、うん」

少女が慣れた風に草をかき分けていくので、素直についていく塔野。しばらく歩くと、木製の扉が現れた。取っ手を回して少女が扉を開き、塔野に手招きする。

「さ、入って」

言われるままに中に入ると、そこは小さな小屋のようだった。小さなテーブルと椅子が2つ、そしていくつか物が置いてあるだけの空間。

少女は救急箱を取り出し、消毒をしたり包帯を巻いたりと手際良く処置を施していく。それを見て塔野は感心するばかりであった。

「すごいね。こういうこと慣れてるの？」

「まあね。自分によくやってるから」

「自分に？ ……何かスポーツでもやってるの？」

「違うわよ。日常生活でケガするの」

「ふうん……」

塔野はとてこの少女がそんなにドジには見えなかったが、不思議に思いつつも頷くしかできなかった。本人がこう言ってるんだし。

「そういえばまだ名乗ってなかったわね。私は花瀬 華。ハナでいいわ」

「あ、うん。僕は」

「塔野くんでしょ？ さっき聞いた。えーつと……とう……とーち
ゃんって呼んでいい？」

「絶対いやだ」

「だよねー。じゃあ塔野でいいや」

「呼び捨てかよ」

そう言って二人とも小さく笑った。

口は悪いけど、割と普通でいい人だな、この子。

残念ながら、そう塔野が思ったのはこの時だけであった。

しばらく二人で会話をしていたところ、唐突に扉が開いた。

「おい塔野いるか？」

「あ、ツンさん！」

そこにいたのはツン。どうやら塔野を迎えに来たようである。ツ
ンが視線をハナに向けると、ハナとバッチリ目があった。

「お、ハナもいたのか。塔野が世話になったな」

「い、いいいいえ！ 滅相もございませんわよ！」

「え？」

塔野は思わず目が点になった。さっきまで普通にしゃべっていた
ハナが、突然謎のお嬢様キャラに変わってしまったのだから。しか
も声がかなり震えている。お嬢様（南極ver）といった感じであ

ろうか。マニアックである。

「お前、本当しゃべり方独特だよな」

「そ、そんなことございせんわ！ あ、そうだ、こ、この薔薇をツンくんに差しあげようと思いまする」

そう言いながらハナは近くに飾ってあった薔薇を一輪抜き取り、その茎を思いっきり力強く握って、ツンの方へ差し出した。が、ご存知の通り、綺麗な薔薇にはトゲがあるのである。

「どどどどうぞ！」

「おお、ありがと……いや、血が出てる。すごい出血してるぞ」

「あら、あらあらあら！ 大変だわ！ 塔野、救急箱を」

「え？ あ、うん。どうぞ」

塔野が救急箱を渡すと、上手いこと自分に処置を行う。なるほど、これは処置も上手くなるな。そう塔野はどこか納得していた。

「ありがたく薔薇はもらっておく……って茎まで真っ赤じゃねえか。怖いなこれ」

「そ、それを私だと思って下さい！」

「いや……確かにお前の血でまみれてるけどさ。まあいいや、もらっておく。そんじゃま、帰るぞ塔野」

「あ、はい」

ツンは血で全体が真っ赤になってしまった薔薇を恐る恐る受け取ってから、塔野を呼んだ。塔野はハナにかなりの違和感を感じつつも、ツンのいる扉の所まで歩き、ハナの方を振り返った。

「えーっと。それじゃね、ハナ」

「あ、うん。バイバイ塔野」

「じゃあな」

「ひゃい！ さ、さようならツンくん！」

……やっぱり何かおかしいよなあ。そう思いつつも塔野はツンとともに喫茶店へと戻っていったのだった。

その7 ハナはテンパる

「ねえハナ」

「なによ」

塔野が花屋に初めて来た次の日のこと。営業時間中にも関わらず花屋に遊びに来ていた塔野がハナに話しかけると、ハナは水やりの仕事を中断して塔野の方へ体を向けた。

「ハナってさ、ツンさんのこと好きなの？」

「な、ななななんでそれを!？」

動揺の余りハナは手に持っていたじょうろを落としてしまい、こぼれた水が地面に広がった。それで靴が思いつきり濡れてしまっているが、ハナはそれどころではないご様子。

「いやあ、見てたらわかるよ」

「そ、そんなに分かりやすい？」

「うん。びっくりするぐらい」

「そうかあー……」

言ってからハナは小さくため息をつく。

「そう。私ね、ツンくんのことずっと好きなの。でもね……」

「う、うん」

そこで間を空けるものだから、ツンには何かとんでもない秘密があるんじゃないか、と塔野は思わずごくりと喉を鳴らした。

「私、ツンくんの本名も知らないの！」

「……へ？」

塔野にとっては予想外過ぎたその続きを聞いても、一瞬、塔野の頭は停止していた。しかしやがて理解し始めたようで、塔野は『あ、ああ』と声を漏らした。

「本名、本名ね。でも店長はツンさんは『ツン』が名前でもあり名字でもあるって」

「そんなわけないでしょ！ あんたバカ！？」

「ひどっ！」

軽く涙目になる塔野。まあハナがそう言うのももつともであるが。

「とりあえず、私はツンくんのこと本当に何にも知らないの。だから知ろうと思って努力してるんだけど……その、うまくしゃべれなくて」

「……たしかに」

昨日のことを思い出して深く頷いて納得する塔野。それを見てハ

ナはやはり自分はうまくしゃべれてないのか、と再確認させられて落ち込んでしまっていた。自分で言ったことなのだが。

「どうすればうまくしゃべれると思う？」

「どう、って言われても……僕は意識したことないよ」

「なによあんた！ 使えないわね！」

「いちいちひどい！」

「おーい、ハナー」

再び塔野が涙目になっていたところに一人の人物が現れた。小夜と同じぐらいの身長で、黒髪の青年である。

「あ、お兄ちゃん」

「お兄ちゃん？ って、僕を店長とニコさんから逃がしてくれた人！」

「んー？ ああ、キミは喫茶店の。塔野くんだったけ？」

「そうです。へえ、ハナのお兄さんだったんですか」

「うん。花瀬 草太っていいいます。よろしくね」

「あ、こちらこそ」

なんともふわふわした二人の様子を見守っていたハナだったが、

ついにしびれを切らしたようだ。二人の間に割って入り、草太の方を向いた。

「で、お兄ちゃん、何か用？」

「ああ、うん。なんかツンくんが呼んでるんだけど」

「つ、ツンくんが!？」

それを聞いたとたん、強気な少女から恋する乙女へとクラスチェンジ。清々しいほどの変わりっぷりである。

「あ、そういえば僕もツンさんにハナを呼んでこいって言われてたんだっけ」

「塔野、もっと早く言いなさいよそれ! あんた役立たず!？」

「さっきからひどくない!？」

「こ、こうしちゃいられないわ。早く行かないと!」

涙目を通り越してもはや泣いている塔野を尻目に、ハナは全速力で駆けていき、近くの花壇に盛大に突っ込んだ。

「えええ!?! なにやってんのハナ!」

「いたたた……曲がれなかったわ」

「ちょっと慌てすぎだよ。別にツンさんは逃げやしないのに」

「そんなことないわ!」

そう叫んでから、悲しそうな表情を浮かべてハナはポツポツと語りだした。顔は泥まみれのため、いまいち深刻には見えないが。

「あれは……まだ私が中学生の頃。ツンくんが免許を取ったつて言うからお祝いにと料理を作ってた時に、振り上げた包丁が緊張し過ぎてすっぽぬけていき……ツンくんの左2センチぐらいのところをかすめていった」

「ええ!？」

「そして今年の初めごろ。雪合戦をしようと言って始めたときのこと。私が頑張って雪玉を投げていたところ、屋根の方に飛んでいったそのうちの一つがつららにぶつかり、ツンくんの前方1・5センチ辺りをかすめていった」

「危ないな!」

「とまあこんな感じで、私は幾度となくツンくんを殺しかけているの。だからいつ逃げられてもおかしくない」

「というか、今まで逃げてなかったのが不思議でならないよ」

「ツンくんはあんたと違って心が広い……って、しゃべってる場合じゃなかった! 早く行かなきゃ!」

「ちょ、待ってよハナ!」

そして走り出したハナは壁に二度三度ぶつかりながらも、なんと

か扉を開き、なんとか喫茶店へと入っていった。それをぼーっと見ていた塔野も、ふと我に帰って追いかけていった。

その7 ハナはテンパる（後書き）

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090z/>

喫茶いわゆる花屋店

2011年12月22日19時53分発行